

第 42 回 大 会 の ご 案 内

荒井 明夫（大東文化大学）

第 42 回大会を大東文化大学で開催することになりました。大東文化大学には東京都板橋区にある板橋キャンパスと、埼玉県東松山市にある松山キャンパスの、二つのキャンパスがありますが、本学会の本学での開催ははじめてとなります。

学会大会開催地である板橋キャンパスは、東京の西北部にありますが、東京西北部には国公立大学が不在です。それゆえ本学は、キャンパスのある東京都板橋区を中心に、周辺自治体との協力・共同関係、つまり地域との関係強化を積極的に展開している大学です。

また、大東文化大学は今年で創立 96 周年を迎えます。つまりあと 4 年で百周年を迎えるわけです。大東文化大学で本学会の開催を打診された際、創立百周年に向けて展開している年史編纂活動の実態をみて頂くことにしました。

大東文化大学の前身である大東文化学院は、関東大震災直後の 1923（大正 12）年 9 月 20 日に文部省の設置認可を受け、翌年 1 月に「専門学校令」にもとづく私立専門学校として開校しました。第一次世界大戦後、社会的諸矛盾が激化する中で、日本回帰ともいうべき現象の中、「漢学振興」の名の下で本学の前身・大東文化学院が設立されました。

大東文化学院創設には、平沼騏一郎や大木遠吉・小川平吉ら近代日本の政治史的キーパーソンをはじめ、吉田熊次・諸橋轍次・井上哲次郎らの東京帝国大学関係者の名前や早稲田大学関係者らの名前が教授陣にみえます。本学の歴史の中で、彼らの新たな一面がみえてきます。

史料見学会は、大東文化大学図書館・書道研究所の全面的な協力を得て、大東文化学院以来の伝統ある書道・書籍を見学します。また、百周年に向けて進む沿革史編纂の現状をみて頂く予定です。本学沿革史は、私立専門学校として発足した他の私立大学と共通する面と、大東文化学院独自の特色などみて頂ければ幸いです。

二日目の研究発表とシンポジウム・総会は東武練馬駅徒歩 5 分の大東文化会館で開催します。板橋キャンパスではありませんので御注意ください。

午後のシンポジウムは「地域と学校」というテーマです。昨年の「教育史における個別史と全体史」に続く教育史研究の方法論がテーマになります。地域・地方は本学会での教育史研究の中核的概念ですが、今日「地域と学校」の関係は、「学校を地域に開く」ことを求めるなど教育政策でも教育実践でも鋭く問われている課題です。翻って、「地域と学校」との関係を問う時、原理的にはその歴史性こそ問題にすべきです。この点の検証を抜きにして「地域と学校」の関係は捉えられないと言っても過言ではありません。本学会での研究蓄積を踏まえ、これまでの研究の総括的な討論ができればと考えます。

多くの会員にお出かけ頂き、充実した大会にしたいと思います。

みなさまのお出かけをお待ちしております。

全国地方教育史学会第 42 回大会プログラム

大会日程表

5 月 25 日（土曜日） 大会初日 書道研究所・大東文化歴史資料館	5 月 26 日（日曜日） 大会 2 日目 大東文化会館
14:00：大東文化会館 2F エレベーター前ロビーに集合。学バスで板橋キャンパスへ移動。 14:30：書道研究所・図書館などを見学。 15:30：板橋キャンパス 2 号館 20221 教室で大東文化歴史資料館による挨拶と説明。その後、自由に資料等を見学。 17:30：「グリーン・スポット」（学食）にて懇親会。 19:45：閉会・解散。 20:00：臨時の学バスで東武練馬駅へ移動。	8:30：受付開始。参加費（2,000 円）。 9:00：研究発表。内容・時間帯は 3 ページを参照。 12:00-13:00：休憩（第 1 会場：K-302 講義室） 11:30-13:00：休憩（第 2 会場：K-404 講義室） 〔※12:00-13:00：第 1 回全国幹事会・第 1 回常任幹事会（K-402 講義室）〕 13:00-15:30：公開シンポジウム「地域と学校」（K-302 講義室） 15:30-16:00：総会（K-302 講義室）

◎大会初日の史料見学会・懇親会のみ、大東文化大学板橋キャンパスにて開催します。参加者は、東武東上線東武練馬駅下車後、徒歩 5 分の「大東文化会館」に集合、学バス（無料）に乗車するのがお勧めです。他の交通手段で来られる方は、14:00 過ぎから板橋キャンパスの学バス乗降場付近でお待ち下さい。

◎懇親会は、板橋キャンパスの学食「グリーン・スポット」で開催します。懇親会費は一般会員 4,000 円、院生・学生会員は 2,000 円です。

◎大会参加費（2,000 円）と学会年会費（4,000 円）は大会 2 日目に設置する受付で申し受けます。準備の都合上、「資料見学会」「懇親会」「研究発表」への参加の有無について、5 月 10 日（金）迄に大会校（荒井明夫会員：arai@ic.daito.ac.jp）へご連絡下さい。メールのタイトルは「地教史大会参加」として下さい。

◎大会 2 日目の昼食は用意しておりませんが、会場周辺の飲食店は充実しています。大型ショッピングモール「イオン板橋」、コンビニ「セブンイレブン」もあります。

◎宿泊は各自で予約して下さい。池袋駅周辺および東武東上線沿線にはホテルが多数あります。

◇会場へのアクセス

（1）大東文化会館（大会初日の集合場所、2 日目）：<https://www.daito.ac.jp/access/>

JR 池袋駅から東武東上線の各駅停車に乗り、約 20 分で「東武練馬」駅にて下車。駅前の「イオン板橋」を目指し、踏切を渡って最初の交差点を右折、池袋駅方面に戻る形で 300m ほど進むと、左側に白壁と木目とガラスが印象的な「大東文化会館」があります。

（2）板橋キャンパス（大会初日の史料見学会・懇親会）：<https://www.daito.ac.jp/access/itabashi.html>

以下の四通りのアクセスが可能です。

◆上記「大東文化会館」地階から学バスに乗り（会場直結で無料、これをお勧めします）。

◆JR 池袋駅から東武東上線の準急・急行に乗り、約 10 分で成増駅にて下車。改札を出て左側のバスロータリーから「赤羽駅西口」行きバスに乗り、約 20 分で「大東文化大学前」下車。

◆JR 赤羽駅北口から「成増駅」行きバスに乗り、約 20 分で「大東文化大学前」下車。

◆都営三田線西台駅から徒歩 15 分。

◇パソコンを使用して発表される会員の皆様へ

事前申込みのあった機材は大会校で用意しますが、パソコンだけはお持ち下さい。当日のセッティングもご自身でお願いします。

■ 研究発表 ・ シンポジウム ・ 総会 ■

〈大会 2 日目 5 月 27 日（日曜日）〉 大東文化会館

研究発表 第1会場 : K-302 講義室

司会：三羽 光彦（芦屋大学）・高田 麻美（帝京科学大学）

(1) 9:00-9:30

1879 年教育令のもとで学務委員に就任した民権運動活動家をめぐって
——岩手県の事例——

谷 雅泰（福島大学）

(2) 9:30-10:00

奈良県女子師範学校附属小学校における児童受入れ方式の改革

林 喜子（名古屋大学 [院]）

(3) 10:00-10:30

わが国における野球少年の登場と「野球少年」像の形成
——雑誌『野球界』・『野球少年』を中心に——

田中 卓也（静岡産業大学）

(4) 10:30-11:00

1930 年代の埼玉県における「新興報徳運動」と報徳教育
——同時代の先行・並行事例との比較を通して——

須田 将司（東洋大学）

(5) 11:00-11:30

愛知県松平公民学校の設立

杉浦 由香里（滋賀県立大学）

◎ 11:30-12:00

全体討論

研究発表 第2会場 : K-404 講義室

司会：佐々木 尚毅（群馬県立女子大学）・遠藤 健治（美作大学）

(1) 9:00-9:30

第二次大戦前の静岡県における准教員養成所設置状況と試験検定実施過程

丸山 剛史（宇都宮大学）

(2) 9:30-10:00

昭和戦時下における県市「教育方針」の存在意義
——「茨城県教育要領」の実践化に着目して——

国谷 直己（東洋大学 [院]）

(3) 10:00-10:30

東京における「私立小学校」の学童集団疎開

柄越 祥子（慶應義塾福澤研究センター）

(4) 10:30-11:00

同和教育が生み出した「摩擦を経た共存」の人間関係——奈良県における中村拓三（なかむら・こうぞう、1923-2002）の実践記録を読み直す——

岡本 洋之（兵庫大学）

◎ 11:00-11:30

全体討論

シンポジウム 13:00-15:20 会場 : K-302講義室

テーマ：「地域と学校」

シンポジスト : 軽部 勝一郎 (甲南女子大学)
(五十音順) 坂本 紀子 (北海道教育大学)
谷本 宗生 (大東文化大学)

司 会 : 荒井 明夫 (大東文化大学)

総 会 15:30-16:00 会場 : K-302講義室

レジュメ・資料等は当日配布いたします。

※以上のほか、大会についてご不明の点は、大会校の荒井明夫会員までご照会下さい。

E-mail : arai@ic.daito.ac.jp

第2回 「地方の状況」

全国幹事に、ご自身が熟知されている地方（居住地・勤務先所在地・研究フィールド等）における教育史研究の現状や新たに発見・編纂された資料についてご報告いただく、「地方の状況」です。第2回は野口穂高幹事にご執筆いただきました。

東京都（新宿区及び豊島区）の状況

野口穂高（早稲田大学）

筆者の居住地・勤務先・研究フィールドは東京都である。東京都内の研究動向については紹介される機会も多いので、はじめに東京都の地方教育通史、自治体史、教育史関係の文献・論文について概観するとともに、その後は地域を限定して焦点化しつつ状況を報告することにしたい。その際に対象とするのは新宿区及び豊島区とする。

新宿区の北西部に位置する落合地域（上落合・下落合・中落合・中井）及び隣接する豊島区の目白・長崎・西池袋・雑司が谷地域は、明治末期から昭和初期にかけての東京市内において、自然豊かな郊外として注目されていた。とりわけ1923年の関東大震災後に住宅地の開発が活発に進められた地域でもあり、現在の目白から中落合、南長崎にかけては箱根土地株式会社により目白文化村が造成され、多くの芸術家や文化人が転居してきた。これら芸術家や文化人が居住した地域は、「落合文士村」とも呼称されている。また、同時期には目白から池袋・要町・長崎・千早地域周辺に、アトリエ付の貸家が多数建てられた「アトリエ村」が点在し、若い芸術家らが表現活動を展開していた。このため、その地域的な特性から、戦後には「池袋モンパルナス」とも呼ばれている地域である。これら文士や芸術家のなかには、秋田雨雀、鈴木三重吉、坪田譲治、武井武雄など、戦前・戦後の児童文化活動に携わった人々も多く、日本の教育にも大きく寄与した。その他、

大正期には、成蹊実務学校や池袋児童の村小学校、自由学園などの私立学校もあり、特色ある教育が展開された地域でもある。加えて、手塚治虫や寺田ヒロオら、戦後の児童漫画の発展を支えた漫画家らが多数居住したトキワ荘も長崎地域にあった。本稿では、これら地域の資料館の調査活動や資料の収集状況も含めて報告する。

1. 東京都の地方教育通史、自治体史、教育史関係の文献・論文

はじめに、前号の大矢会員の報告を参考に、東京都の地方教育通史、自治体史について述べる。橋本昭彦氏による『地方教育通史一覧 2015年版』では、東京都内の教育通史 177 件を掲載している。ただし、2010 年以降に刊行された文献はなく、地方教育通史や自治体史の刊行は少ない状況にあったことが窺える。

ただし、近年では、自治体史の編纂や刊行を進める自治体が増加している。その主な背景としては、各区や市の周年事業の実施が挙げられる。戦前の東京市では、1878 年の郡区町村編成法により 15 区 6 郡が置かれた。1932 年には、東京市が周辺域の 5 郡 82 町村を市に編入することで新たに 20 区を設置し、従来の 15 区を合わせて計 35 区とした。戦後の東京都では、各区の財政や自治権の基盤を確立するため戦前の 35 区の行政区の再編が進められ、1947 年 3 月には 22 区となり、同年 5 月の地方自治法施行により現在の特別区への移行がなされている。さらに、同年 8 月には板橋区から練馬区が分離し、現在の 23 区となった。このため 2012 年を区制 80 周年、もしくは 2017 年を区制 70 周年に位置付け、記念事業を実施した自治体が多数存在しており、これらの事業の一環として記念誌の刊行や自治体史の編纂・刊行を行う地域が多い。

以下、都内 23 区の HP を閲覧し、筆者が確認できた範囲で動向を報告する。まず、全体を概観すれば、地方教育通史及び自治体史を刊行した、もしくは現在編纂中の自治体は、港区、文京区、品川区、世田谷区、豊島区、葛飾区であった。既に刊行されたものを挙げれば、以下のようになる。

- ・文京区『文京区史』2018 年。
- ・文京区『文京区史 資料編』2018 年。
- ・品川区『品川区史：歴史と未来をつなぐまちしながわ 2014』2014 年。
- ・葛飾区『葛飾区史』2018 年。
- ・葛飾区『子ども葛飾区史』2018 年。

たとえば文京区では、区制 70 周年を記念して『文京区史』の本編と資料編を 2018 年 3 月に刊行している。この『文京区史』は、1967 年から 69 年にかけて刊行された『文京区史』全 5 巻の続編であり、文京区が成立した 1947 年頃から 2017 年 3 月までを主な対象期間としている。また、編纂の方針としては、区民生活や地域の視点から社会の変化を捉えるように編集したという。教育分野については、1983 年に刊行された『文京区教育史』をもとに、その後の 35 年間について記載されている。同様に、葛飾区では、区制 80 周年事業の一環として、『葛飾区史』『子ども葛飾区史』が刊行された。

港区においては、区制 70 周年記念事業として、2021 年刊行予定で『港区教育史』の編纂が進められている。さらに、2020 年から 2024 年にかけて刊行する予定で『港区史』の編纂も開始されたという。この他、世田谷区、豊島区でも周年事業として区史の編纂が進められている。

同様に、東京都の市町村でも、周年事業の一環に位置付けられるなどして自治体史の刊行や編纂がなされている。区の場合と同様に、26 市 5 町 8 村の HP により状況を確認した。自治体史や地方教育通史を刊行したり、現在編纂を進めたりしている市町村としては、八王子市、立川市、武蔵野市、府中市、小金井市、小平市、狛江市、清瀬市、東久留米市、羽村市の 10 市が確認できた。既に刊行された文献のうち、主要なものは以下のようである。

- ・八王子市市史編集委員会『新八王子市史』通史編及び資料編 全 14 巻、2013-2017 年。

- ・武蔵野市教育委員会『武蔵野市教育史：1990-2014』2018 年。
- ・小平市史編さん委員会『小平市史』近世編、近現代編、地理・考古・民俗編、2012-2013 年。
- ・東久留米市教育委員会『東久留米の近代史：明治・大正・昭和前期』2013 年。

2000 年代以降、東京都内では、地方教育通史や自治体史の刊行は少ない状況にあったが、現在は活発に調査・編纂が進められている状況にあるといえよう。今後の刊行が俟たれる。

また、これら地方教育通史や自治体史のうち、一部については DVD 等により電子資料を付したり、電子版を公開する地域や、過去の自治体史を電子化して公開する自治体が一定程度ある点は注目すべきである。たとえば、港区の HP に公開されている港区教育史編纂委員会の会議資料によれば、新しい『港区教育史』は、区民がいつでもどこでも教育史を閲覧できるようにするため、web 版を機軸として公開する予定との事である。このように形態や公開の方法が多様化している点も、近年の特徴といえる。

教育史関係の文献・論文はどうであろうか。前号の大矢会員の報告と同じく CiNii 論文検索で、2013 年以降の東京都の教育史関係の論文・博士論文を以下のキーワードにより検索した。論文+博士論文で「教育史 東京」では 140+1 件、「学校 歴史 東京」で 199+1 件、「教育 東京 歴史」で 374+5 件、「学校史 東京」で 0+0 件、「教育政策 東京」で 190+1 件、「教育行政 東京」で 121+2 件、「教育経営 東京」で 14+1 件である。また「大学図書館の本を探す」から「学校 歴史 東京」「教育 歴史 東京」についても検索を行い、それぞれ 94 件、156 件がヒットした。これらから主な文献を以下に掲げる。

- ・荒巻恵子、坂本和良、砥柄敬三「東京都の特別支援学級史(1) 特別支援学級の成立・明治期」『帝京大学大学院教職研究科年報』7 号、2016 年、43-57 頁。
- ・石井智也、石川衣紀、高橋智「関東大震災後の東京市教育復興計画と多様な教育困難を有する子どもの特別学級編制」『日本教育史学会紀要』4 巻、2014 年、68-87 頁。
- ・大木匡尚『『東京都社会科教育課程』(1955 年 3 月)の成立に関する考察——中学校の部「歴史的内容を主とするもの」の分析を中心に』『歴史教育史研究』11 号、歴史教育史研究会、2013 年、38-56 頁。
- ・大木匡尚「東京都南多摩郡七生村立七生中学校における 1951 年度の社会科日本史カリキュラム検討」『同上』12 号、2014 年、39-60 頁。
- ・大木匡尚「1955 年版学習指導要領改訂に際しての地方教育委員会作成による中学校歴史的的分野カリキュラムの考察——東京都教育委員会作成『東京都社会科教育課程指導書』を手掛かりに」『総合歴史教育』52 号、総合歴史教育研究会、2018 年、35-48 頁。
- ・呉永鎬「朝鮮学校の生活綴方——東京都立朝鮮人高等学校『新芽文集』(1952 年)を読む」『教育史フォーラム』12 号、教育史フォーラム・京都、2017 年、67-87 頁。
- ・檜下達也「東京市小学校ハーモニカ音楽指導研究会の設立(1937 年)とその音楽教育史上の位置」『日本の教育史学』57 集、2014 年、58-70 頁。
- ・菅道子「1930 年代東京市における絶対音感教育の創始とその展開——ピアノ基礎教育から公立尋常小学校での萌芽的实践への流れ」『音楽史研究』19 号、音楽教育史学会、13-24 頁。
- ・田中謙「戦後日本の障害乳幼児支援における幼児グループの展開過程の特質——東京都東村山市「愛の園幼児室」を事例として」『教育経営研究』1 巻 1 号、山梨県立大学人間福祉学部教育経営研究室、2015 年、33-41 頁。
- ・田中謙「戦後日本の通園事業における障害幼児支援の特質——1970 年代の武蔵村山市「ちいろば学園」を事例に」『同上』2015 年、67-75 頁。
- ・東京都社会教育史編集委員会『大都市・東京の社会教育——歴史と現在』エイデル研究所、2016 年。
- ・西出勉「昭和初期における幼稚園と尋常小学校との連絡に関する教育史的考察——東京市保育会における資料調査を通して」『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要』15 号、2015 年、75-90 頁。

2. 新宿区及び豊島区の状況

次に新宿区及び豊島区の状況を報告する。はじめに新宿区の状況を述べる。『地方教育通史一覧 2015 年版』及び新宿区立図書館の HP によると、新宿区の主な地方教育通史、自治体史については以下の文献が刊行されている。

- ・新宿区『新宿区史』1955 年。
- ・新宿区『新宿区史 資料編』1956 年。
- ・新宿区『新修新宿区史』1967 年。
- ・新宿区教育委員会『新宿区教育百年史』1976 年。
- ・新宿区教育委員会『新宿区教育百年史 資料編』1976 年。
- ・新宿区『新宿区史：区成立三〇周年記念』1978 年。
- ・新宿区『新宿区史：区成立四〇周年記念』1988 年。
- ・新宿区『新宿区史：区成立五〇周年記念』第 1 巻、第 2 巻、資料編、1998 年。
- ・新宿区『新宿時物語：新宿区 60 年史』2007 年。
- ・新宿区『新宿彩物語～時と人の交差点～：新宿区成立 70 周年記念誌』2017 年。

新宿区では、1955 年の『新宿区史』以降、およそ 10 年ごとに自治体史を刊行してきたことが分かる。一方で、近年では位置づけや内容に変化もみられる。最近刊行された『新宿彩物語』を例にとれば、読みやすさを重視し写真や図表、年表を多用するとともに、新宿区にゆかりのある人物のインタビューを多数掲載するなどしている。2000 年代以降の新宿区の自治体史は、歴史的な内容を含むものの記念誌や広報誌としての性格が強くなっている点が特徴といえる。『新宿区教育百年史』の刊行からは 40 年以上が経過していることもあり、今後は、これら記念誌と併せて、学術的な見地からの自治体史や地方教育通史の編纂も求められるだろう。また、新宿区では、区史の電子化も進められており、1998 年刊行の『新宿区史』（第 1 巻、第 2 巻、資料編）の内容がデータベース化され、新宿区立図書館の HP で公開されている点も近年の動向として挙げられる。

その他、昨今は、新宿区による歴史的建造物の保護や整備・公開も進められている。とりわけ落合地域には『放浪記』や『浮雲』で知られる林芙美子の自宅を保存した林芙美子記念館（新宿区中井）、成蹊学園の中村春二と親交があり、中村の肖像画を描いた中村彝のアトリエを復元した中村彝アトリエ記念館（新宿区下落合）、洋画家佐伯祐三のアトリエ付き住宅を整備した佐伯祐三アトリエ記念館（新宿区中落合）などがある。いずれも、大正期から昭和期のアトリエ建築の設計や、作家や画家の当該地域での暮らし向きを現代に伝えている。

次に、豊島区の状況を述べる。豊島区の自治体史としては、1974 年から 1992 年にかけて刊行された『豊島区史』（通史編 1～4 巻、資料編 1～6 巻、地図編上・下巻、年表編）があり、区内の教育史についても通史的に描かれている。また、詳細は明らかではないが、豊島区の HP によれば、2022 年の区制施行 90 周年に向けて新たな区史の編纂を開始しているという。先の『豊島区史』では、古代から昭和までを対象としていたが、新たな区史ではその後の平成以降を対象として編纂される予定である。その他、区史の編纂に向けて web 版区史として「としまひすとりい」が 2018 年より公開されている。現状では準備中のページも多いが、豊島区関連資料のアーカイブ化を図り、区史本編とも連動させた新しい区史のスタイルを展開することを目指しているという。これに併せて過去の『豊島区史』も「としまひすとりい」内の web ページ上で公開されている。

これら豊島区内で史料の収集・保管や調査研究、さらには区史の編纂を主として担うのは豊島区立郷土資料館である。郷土資料館は、1984 年に開設され、2017 年に改装がなされた。リニューアル記念企画展では、「学びと暮らし」のタイトルで江戸期の寺子屋の門人覚帳や往来物、明治期の公立小学校の教材を展示するなど、豊島区の教育史をテーマとする企画展もこれまで多く開催している。また、最近の史料収集の状況の

うち注目すべきものとして、2017年に児童画520点が郷土資料館に寄贈されたことが挙げられる。これらの児童画は、1930年代から40年代にかけて豊島区の公立小学校及び中野区の女学校を卒業した同一の人物が描いたものであり、教員のコメントや評価なども添えられている。昭和初期以降の学校における美術教育の実態や、その段階性及び連続性を探るうえで貴重な史料といえる。

なお、豊島区では、現在の郷土資料館の機能を充実させつつ、郷土資料分野、美術分野、文学・漫画分野の3分野を連携させた「芸術文化資料館」の開設に向け準備を進めている。冒頭でも述べたように、新宿区内や豊島区内には、戦前より美術や文学、漫画などに携わる人々が多数居住し、芸術活動や児童文化活動を展開していた。また、1908年には豊島師範学校が設置され戦前の教員養成を担うとともに、大正期には新教育を实践する特色ある私立学校が複数開設されるなど、教育においても豊かな活動が展開された地域である。今後は、これら地域的な特色を踏まえつつ、学際的な視点による資料の収集・保管や調査研究の進展が期待される。

◆寄贈図書（2019年3月31日までの事務局到着分）

吉野剛弘（2019）『近代日本における「受験」の成立——「資格」試験から「選抜」試験へ——』（埼玉学園大学研究叢書）ミネルヴァ書房、¥5,832（本体¥5,400）。

◆入会・退会・異動（2019年3月31日までの事務局到着分）

入会：長谷川真行（早稲田大学〔院〕）：天野貞祐の道德教育観の戦後道德教育への影響。

異動：杉山実加（名古屋女子大学短期大学部）、2019年4月1日より名古屋短期大学。

◆事務局より

新年度に異動された方は、事務局まで、①異動先（名誉教授となった方も、その旨、お知らせ下さい）、②新しい配布物郵送先、③事務局からの連絡先電話番号およびメールアドレス（自宅・勤務先、固定・携帯、公用・私用の別を問わず、複数登録も可）を、メールにてお知らせ下さい。なお、非公表を希望するものがある場合は、その旨、明記して下さい。

また、昨年度（2018年度）の会費が未納の方には払込取扱票を同封してあります。郵便局・ゆうちょ銀行でお支払い下さい。

全国地方教育史学会 事務局

〒002-8502

札幌市北区あいの里5条3丁目1-5 北海道教育大学 三上敦史研究室内

TEL/FAX 011-778-0380

E-mail mikami.atsushi@s.hokkyodai.ac.jp

学会ホームページ <http://www.waseda.jp/assoc-zckyoiku/>
